

8章 おもしろ気象コラム

◆ナポレオンが冬将軍に敗退は本当か？

◆カミカゼは日本を救い、歴史を変えたか？

◆芭蕉の奥の細道、佐渡の荒海」句に台風の影響あり。お天気推理

◆ノンフィクション 空白の天気図、洞爺丸台風はなぜ沈んだか？」ほか

◆消えたオホーツク文化人

◆詩人宮沢賢治の化身、ブドリの働き

+++++

◆「ナポレオンは冬將軍に敗れた」は本当か？

日本の冬の寒波に登場するのが「冬將軍」です。この冬將軍のいわれは、モスクワに突入したナポレオンが厳冬と積雪に悩まされた史実に因む冬の異名、冬の厳しさを擬人化したもの、とされていますが、もともと冬將軍という言葉のルーツはさだかではありません。自然の厳しさ寒さが大きな幻の影となつて怪物のように舞い狂う冬將軍と見えたのでしょうか。

本当にそうなのでしょうか？ナポレオンのモスクワ遠征戦争をロシア側から見た小説がトルストイの「戦争と平和」ですが、そのなかには「冬將軍」という言葉はありません。ロシアの自然誌のなかで冬將軍に相当する言葉として登場するのが白い髭をはやした「いじわるマロース爺さん」です。厳しい寒さや雪や吹雪をもたらす強大な力への恐怖と怖れから、怪物マロースに厳しい寒さを擬人化させたものでロシアの言葉には冬將軍という言葉は見あたりません。

それでは、ナポレオンは本当に冬將軍に敗れたのでしょうか？

たしかにナポレオンのモスクワ遠征の年、1812年の12月から翌年の2月に

かけての厳しい冬の寒さは尋常ではなかったのです。当時、ヨーロッパは小氷期と呼ばれている歴史的な低温期の最中で、その年はさらに厳しい冬が重なっていたのは事実です。遠征ルートに近い、気象観測では定評のあるドイツのベルリンでみてみると、12月の平均気温が平年より7.9も低いマイナス7.3度となり、歴史的な低温であったのは間違いなく、年明けても厳しい寒さが続きました。

この年の厳しい寒さは遠く日本でもおにも及びました。寒さで諏訪湖が結氷して湖面にジグザグの水丘列が走る諏訪神社に残る500年にもわたる「御神渡り」注1の記録からも、この年は12月26日に湖面が結氷し、御神渡りの日が12月30日と、するち異例の早さとなりました。この記録は、1700ねんから1899年の200年間で最も早い記録というほど異常な寒さでした。淀川を凍らせ、両国の川に氷が浮かぶこの年の冬は尋常の寒さではなく、ナポレオン遠征が終わったころの冬は、まさに100年に1度あるか無いかの世界規模での異常な寒冬だったのです。

しかしながらナポレオン軍は歴史的な厳しい冬の前にすでに敗走していたのです。「1812年の雪―モスクワからの敗走―」注2によれば、ナポレオンのモ

スクワ遠征は12年の初夏、6月24日、42万人の軍隊でロシア国境を越えたところから始まりました。東京から青森までの距離の遠征をへて9月にモスクワに入城したときにはすでに兵力が3分の1に激減していました。

さらに10月13日にモスクワに降った初雪で遠征軍が浮き足立って、翌日には総退却を決めたほどです。退却戦は悲惨さが常であり、11月のはじめの寒波で大きな打撃を受けたナポレオン軍は、緯度が高く晩秋の日は短く、秋の陽はつるべ落としのように夜がすぐに迫ってきました。次ぎに襲来する寒波とコサックの追撃を受けて総崩れとなり、冬始めの12月の半ばに、国境まで戻れたナポレオン軍はわずか5千人、およそ100分の1まで激減してしまい、壊滅的な敗北を被っていたのです。

厳しい寒さというロシアの自然の軍隊に不敗のナポレオン軍が敗れ去ったというところにイギリスの記者が「ナポレオンは將軍に敗れた」と書いたといます。しかし、ナポレオン軍は、1812年の歴史的な寒い冬の襲来を待たずして、すでにふつうの寒さに大敗して敗走していたのです。戦略のまずさと冬の先駆けの寒さにとどめを刺されたのが史実です。

地球温暖化の探査のため、深い眠りから

覚まさせられた氷の化石から未来を予測
しますと、地球の高温化でいずれ「冬將軍」
という言葉も死語となるのも、そう遠くな
いでしょう。

+++++

注1)「御神渡り」は厳しい寒さで諏訪
湖が結氷して湖面にジグザグの氷丘列が
走る現象で、

注2) 両角良彦著、『812年の雪―
モスクワからの敗走』中公新書)

+++++

◆ カミカゼ台風は日本を救ったか？

歴史の上で日本を救ったカミカゼ、鎌倉時代に蒙古が日本に襲来した、いわゆる「274年お文永の役、1281年の弘安の役」のいわゆる元寇があります。神風が吹いて九州に襲来上陸した蒙古軍が撤退したとする、日本における神の国思想の「カミカゼ」につながっていたのです。確かに、2回目の、弘安の役は、夜、大風雨に遇う「膨大な漂流物や、難破した船からみて、このときは台風、暴風が吹いて壊滅的な被害を受けて撤退したことは間違いないありません。国難を救った神風です。

しかしながら「1回目の元寇である文永の役の終わり告げたのは台風ではない」注1）といわれています。元、高麗連合軍が引き上げたのは、現在の暦にして晩秋の11月26日の夜です。現在でもおくて台風が11月に襲来して、最も遅い日本への上陸が30日だったこともあり、場所が九州北部ということを考えれば可能性は捨てられません。

しかし当時の資料からみて、突然、台風に襲われたという資料が見当たらないのです。多数の艦船が沈めばおびただしい残骸が海岸に流れついてもよいはずですが、その記録はないのです。むしろ整然とした撤退作戦からみて、帆船として逆風となる

冬の北西季節風の吹くまえ撤退したのではないかとの説明のほうは歴史資料からみて有力なものです。この11月は春とともに日本海で発達する爆弾低気圧の季節ですが、発達は、日本海中部に進んだところがおおいので、まだ日本海西部で発達し始めなのです。仮に巻き込まれたとしても壊滅的にはならないのです。1回目の元寇の文永の役は、神風は吹かず、2回目の弘安の役はまさにカミカゼだったといえます。

もともと「神風」の由来は、後の天武天皇となる大海人皇子と天皇側の大友皇子が戦った壬申の乱に遡ることができるといわれています。天皇軍の京都方面に対して、大海人軍が美濃（岐阜県）方面から南東の追い風を受けて攻め込み、戦いに勝利したといえます。この時代、弓の戦いでは追い風は大へん有利なのです。

さらに明治維新のおりに榎本武揚率いる旧幕府艦隊に大打撃を与えて、時の維新政府を助けたのも日本列島の南海上を通過した10月の台風だったのです。旧幕府の艦隊は、新政府軍の艦船に比べ装備、訓練ともに圧倒的に優勢な力を持っていたのです。江戸開城前夜においても、実現はしなかったのですが、新政府軍が箱根を越えたら幕府艦隊で新政府軍の退路を断つなど戦略が検討されたほど無敵な戦力でした。江戸城が新政府軍にひきわたされ後、この艦船の主力が榎本艦隊となって北海

道で独立王国を作るなど江戸脱出を図ったのです。

ところが、榎本武揚には不幸、新政府側にとつて幸運にも、江戸（現在の東京湾）を出港して太平洋にでた途端、強い台風に襲われ、小さな艦船と補給船の多くを失い、最新鋭の軍艦、開陽丸が舵に被害を受けてしまった。このため明治維新直後の東北での戦いに遅れをとつて明治政府を助けたのです。新政府にとつてはまさに「カミカゼ」となったのです。その後、北海道の函館、五稜郭で、新政府軍との戦いとなりましたが、ついには主力の開陽丸が函館の北西の海岸で、冬の猛烈な嵐に巻き込まれて座礁、暴風雪の中で海の藻屑と消えたのです。自然からの再三再四の攻撃で大打撃を被った榎本軍は新政府軍の前に降伏しました。台風ではじまり冬疾風で止めを刺された榎本武揚らは、後日、部下の荒井郁之助とともに、日本における近代の気象業務の基礎を築いた中心メンバーとなったのです。気象にいたためつけられた旧幕府の第1級の知識人たちが気象の発展に尽力したのは歴史の必然かもしれません。

+++++

第 x 函

+++++

注1) 元寇、文永・弘安の役

注2) お天気日本史」 荒川秀俊著、河

出文庫)

+++++

◆奥の細道、佐渡の荒海」の芭蕉の句に
台風の影響

芭蕉が旅した「奥の細道」には、弟子の曾良の「随行日記」注1）に折々の天気の記事が詳しく書かれていました。いくつか論争点を整理して、芭蕉は佐渡の荒海を見たか？」などをお天気推理してみます。

芭蕉が江戸深川を出発したのが、元禄2年（1689）新暦に直して5月19日のことでした。梅雨前線の北上とともに、東北地方への入り口の白河の関を越え、梅雨の中休みの好天で仙台の近くの松島に遊び、雷をとまなう豪雨に見舞われながらの峠越えで尾花沢に着きました。終日、ぐずぐずの梅雨空が続き、立石寺、新庄をへて最上川を酒田へ下る途中で詠ったのが、
『五月雨をあつめて早し最上川』となつたのです。出羽（山形県）の象潟の帰り道で大雨にあい、着物の中まですぶ濡れなってしまうほどでした。8月3日になって、快晴となり鳥海山がよく見え、陸から海に吹く『アイ風』の東よりの風となつて梅雨が明けたのです。注2）。

さて、芭蕉は佐渡の荒海を見たか？という疑問です。芭蕉の句、『荒海や佐渡によこたふ天河』には、天の河』論争と言って、この季節、新潟の柏崎からみた天の河

は、天文学からみて佐渡の上に横たわることはない。従つてこの句は芭蕉の詩的幻想の中の産物」であると言われています。確かに曾良の日記では、佐渡が見える新潟県の出雲崎を歩いた頃は天気がグズつき気味で佐渡もよく見えなかったし、アイの東風が3日ほど続き、波も穏やかで荒波を前景に佐渡が横たわる情景が浮かびません。やはり、想像の産物だったのでしょうか。

『荒海・・・』の句は、出雲崎ではなく8月22日の高田で詠まれているのです。ここにカギがありそうです。

1週間前の15日頃に前線の南下の兆候を示す強い雨に見舞われ、東よりの風が3日も続いたあと、18日には夜中、雨強く降り、19日と20日は「雨晴。…」と台風に先行する驟雨（わか雨）性の雨と晴れの混沌とした天気となっていました。前日の21日、日本海にのぞむ港である直江津に泊まつており、曾良の日記では「夜中、風雨甚（はなはだし）」と書かれ「嵐」に出会っています。『荒海や』の句を発句した直前に芭蕉は、台風で荒れる日本海の荒波の姿をしっかりと刻み込んでいたと考えるのが自然です。

また22日の高田の句会では「嵐庭吹払う石の塵（右雪 曾良）」のことから、芭蕉一行は、確かに台風の嵐に高田で出会っているのです。『風雨甚し』とかいた曾

良の日記では、9月9日の金沢で出会った嵐の2回しかこの言葉がありません。夏の3カ月の長い旅で1度や2度、台風と出会えないほうが不自然です。強い嵐の通過の後、25日から「猛烈な暑い日が続く」、前線を押し上げて残暑型の猛暑をもたらす、日本海を通る夏台風特有の経過と、この曾良の気象記事が良く一致しているのです。

このち芭蕉一行は越後の高田から早く越中へ抜けようと出発を急ぎましたが北陸道一の難所「親知らず子知らず」を目前に強く引き止められたのです。親知らず海岸の難所は、北アルプスが海際までせりだし断崖となっており、旅人は波打ち際を走つて越えるというところで、台風之余波で荒れた海では当然渡れません。波が収まった25日にやっと親知らずの險を抜けて富山の能生につきました。

一連のお天気経過からして、芭蕉一行は夏台風に出会っています。それも8月21日の港町の直江津で日本海の荒海を見て、その厳しい情景を胸に秘めて、明くる日の高田の句会で台風の実体験の荒波と重ねて「天の河と荒海の佐渡」と詠んだと、お天気推理できるのです。

+++++

第x回 おくの細道、お天気推理

+++++

注1)

奥の細道」、と弟子の曾良 随行日記」

注2) 象潟の返り道で 吹浦ニ到ル前カラ甚雨』で停滞し、あくる8月1日も吹浦で雨強ク甚濡。…衣類借リテ濡衣干ス』、2日まで雨が続いた。そして3日は快晴となり、 鴈海山の晴嵐ヲ見ル』、 アイ風吹テ山海快』となる。

◆気象ノンフィクション 空白の天気図

気象のノンフィクションでは柳田邦男の『空白の天気図』注1)が第一に挙げられます。敗戦直後の1945年9月17日、原爆の被災地広島を襲った猛台風「枕崎台風」が、戦争による情報網の壊滅による天気図の空白が、戦争で荒廃した広島にさらに悲惨な災害をもたらしてしまった有様を、緻密な取材をもとに、冷静な記者の目で書かれています。

九州の南端、枕崎に上陸した猛台風は、観測史上第2位の916hPaの最低気圧を記録して広島に向かったのです。当時、情報網が壊滅していた日本では、この大変な台風である情報が広島県民にはほとんど伝わっていませんでした。原爆と空襲で荒廃した広島が市中を見渡すと全市が湖となり、8月6日の原爆砂漠が一夜にして原爆湖水に変わった」と地元の新聞で報じられました。被爆者の治療にあたっていた療養所が洪水と土石流に襲われて多くの医師や看護婦が犠牲となってしまうました。あまりにも大きな災害のため「枕崎台風」と命名され、室戸台風、伊勢湾台風とともに昭和の三大台風のひとつとなり、死者行方不明3756人のうち広島県だけの死者が2012人のほりしました。

さらにノンフィクションの双璧は上前淳一郎『罌丸台風はなぜ沈んだか』注2)

が洞爺丸台風の出航から遭難までの、気象状況と船長など関係者の心理的な動き、決断に至る過程や、当時出航を促した国鉄の関係者と葛藤など緻密な展開が興味深い。そして、洞爺丸台風には当時、解明されていなかった三つのナゾが残された。偽りの晴れ間、ナゾの減速、そしてナゾの再発達である」とかかれています。魔の手に引き寄せられていく過程が気象という縦糸と、出航から遭難という心理描写を横糸に書き進められていきます。それにもくいくほど冷静な目で描かれていくのです。

中心気圧895hPaと猛烈に発達した台風18号にラワンを満載した6000トンの貨物船が巻き込まれ、その船長さんが書いた『吾風と闘う船長』が興味深い。気圧が1時間で23hPa下がり、ジンジンと耳鳴りし、視界ゼロ、狂乱怒涛の波で船先が60度左右にゆれ、天が裂けてしまった。気圧は一体どのくらい下がるのであろうか。暴風は猛り狂うばかりで、最大風速は85km/hをはるかに越えているが、あまりにも強烈で感覚が麻痺した」と恐怖と船長としての責任感で客観的なき方となつていきます。そして船底が柔らかな砂底に座礁し朝の光とともに危機を脱したのです。

また上前淳一郎の『覆合大噴火』が面白い。江戸時代の1783年夏、天明の浅間山の大噴火を縦糸に、時を同じくして大噴

火をしたヨーロッパ、アイスランドのラキ火山のドラマを横糸に複雑に絡ませながら話がすすみます。火山灰などの日傘効果で世界の平均気温を下げて、日本では天明の大飢饉が相次ぎ、混乱のなかで時の絶対権力者、老中、田沼意次が失脚しました。ヨーロッパの気候の悪化で、フランスでは都市部でのパンの不足が続く、ついには1987のバスターミューの暴動となりフランス革命に突き進んだのです。打ち続く自然災害が文明を滅ぼし、国家を滅ぼし政権を変えてきたのです。浅間山とラキ山の噴火という偶然の自然災害をめぐる展開は見ごたえがあります。

小説では、幸田露伴の『五重の塔』があり、大阪の四姉妹が主人公である谷崎潤一郎の『細雪』の中でも、一家が数人の家族とともに、台風の恐怖体験をしたことが描かれています。また『海峽は荒れていた』で始まる、水上勉の小説『飢餓海峽』では、洞爺丸台風に襲来で遭難した青函連絡船の惨事と同時進行していた北海道岩内町の大火を舞台にした強盗殺人事件を横糸に、層雲丸遭難で混乱を極める津軽海峽を隠れ蓑に日本版の『ミゼラブル』の物語です。

本を2、3冊写真でしめす。

+++++

注1) 柳田邦男の『空白の天気図』

注2) 上前淳一郎『霏丸台風は

なぜ沈んだか』文芸春秋社

注3) 大前晴保著『台風と闘う船長』

注4) 上前淳一郎著『覆合大噴

火』文芸春秋

注5) 水上勉、『飢餓海峡』

◆ 消えたオホーツク文化人

オホーツクの海を埋めつくす流水は、神秘とロマンをたたえ悠久の時を越えて冬とともに襲来し春とともに消え去って行きます。その流水野の広がり縁を結ぶようにオホーツク文化を担った流水の民が現われ消えました。

サハリンの沿岸から北海道のオホーツク沿岸、そして千島列島南部の島々へと、流水の南の縁を結ぶ鎖の環のように海岸線にそって遺跡が点々と連なり出土しています。土器やセイウチの骨を加工して造られたオホーツクビーナスと呼ばれる女人像も出土し、北方の文化が幻でなく確かに存在していたのです。時代は8世紀頃の奈良時代とともに現われ、鎌倉時代の13世紀までおよそ600年続き、14世紀とともに忽然と消えてしまいました。アイヌ人でも日本人の祖先でもない、海の狩猟の民であるオホーツク文化人なのです。

流水は、シベリア大陸のアムール河から流れ込んだ大量の淡水が、オホーツク海の表層の塩分を薄めて、凍りやすくしたため、冬の寒さで凍り、海流と季節風で流され南下して拡大していったものです。四方を陸と島弧で囲まれて閉じたオホーツクの海は、流水がでやすく、世界でももっとも南まで流水野が広がることで知られています。流水の街、網走は北緯43度、地中

海のフランスの南海岸と同じ緯度なのです。

流水の下は植物性のプランクトンが豊富でタラやニシンが集まり、トドやアザラシがそれを追う。豊かなオホーツクの海を背景に、海の狩猟民族であるオホーツク文化人は決して海岸から離れませんでした。

なぜ8世紀に現われたのか、なぜ13世紀末にこつぜんと消えたのか？なおナゾは流水とともに残されました。流水は気温の変動にきわめて敏感に連動しています。キーワードは『流水』です。

この時代の古気候からの気温変動を知るには、湖の底に積もった層から調べることになります。植物死して花粉を残す、固い殻で守られた花粉は長く残り、泥炭1グラムには10万個ほどの花粉があり、花粉を出す植物は気温の変化に敏感に反映し、花粉帯と花粉ダイヤグラムで気候の変動を知ることができるのです。注2。

花粉が含まれる地層は、放射性同位元素の年代測定でいつの時代かがわかるのです。福島県と群馬県の県境に広がる尾瀬高原湿原の泥炭層からは過去7000年の気候変化を詳しくわかるのです。これのよると縄文時代は温暖でしたが、3世紀から7世紀かけての古墳時代は、日本では過去数千年で最も寒冷な時代となっていました。しかし8世紀にはいると一転して温暖

な気候へと激変したあと穏やかな気候は13世紀まで続き、14世紀にはいると再び中世の寒冷期に突入したことがわかります。まさにオホーツク文明の流水の民の出現と、幻となった時期と重なっているのです。

寒冬の年は流水の到来が早く、海を長く閉ざされるようにオホーツク海の流水は気温で大きく変動し、年々の気温の変動は流水の消長の大きくかわるのは当然です。8世紀とともにやってきた温暖な中世の時代となると、流水の勢力は弱まり、豊かな海の富を追ってオホーツク海の『流水の民』がやってきました。そして数百年の時間が過ぎて再び寒冷化したオホーツクの海は、海を閉ざす流水野が長く居座り、海の獲物取ることができなくなった海の民は沿岸を去ったのです。尾瀬高原の花粉ダイヤグラムから得られた気温の変化から裏付けられています。オホーツク文化が栄え、寒冷化とともに消えていったのは偶然ではなく地球規模の気候の変化が、幻と呼ばれているオホーツクの海の狩人を招き、そして去らせた。滅びたのではなく故郷へ戻ったではなからうか」と郷愁をこめて言われています。

++++++
++++

第 x 函

オホーツク海の沿岸の遺跡と、気候変動の
記録

++++++
注 1) オホーツク遺跡

注 2) 安田喜憲著、気候と文明の盛衰
〔朝倉書店 花粉による気候変動の研究で
は第一人者で、世界中の花粉の研究で、文
明の盛衰を研究した本である。〕

◆ 宮沢賢治の化身、ブドリの働き

宮澤賢治の詩「雨ニモマケズ 風ニモマケズ」は1931年(昭和6年)の晩秋に岩手県の花巻で書かれた注1。この年、東北地方は記録的な冷夏に見舞われ大凶作となりました。賢治が6歳の年に始まった明治の末からはじまった大凶作があいつぎ、1923年、17歳の学生の時に江戸、天保の大凶作以来の最悪となりました。大凶作が集中するこの時期に岩手県の花巻や盛岡で多感な少年 青年時代を送った賢治は、凶作の惨状を心の奥深くに刻み込み、気象へ深い関心を抱き生涯にわたって冷害と対峙し続けました。

二十十日から始まって二百二十日の嵐」の章でおわるガラスのマントを纏った「嵐の又三郎」、銀河系の中へ夜汽車を走らせ「銀河鉄道の夜」は、地球から銀河の異次元への幻想空間へ「天気輪の柱」という丘の丘から旅立たせました。和風は河谷いっばいに吹く」の五九行の詩は、冷害と長雨で痛めつけられ、雷と稲光の中で倒れ伏す稲が、穏やかな南風が谷いっばいに吹いて、稲が次第に起き上がるという、絶望から歓喜へと急転回する自然との戦いが早いテンポよく描かれています。

宮沢賢治の化身とも思える若きブドリを登場させて、気候改変の夢を託してイー

ハトウの世界 注2)を冷害から救い波乱の生涯を終えるという「アスコブドリ」の伝記」は70年前に書かれたと思えないような斬新さがある物語です。

冷害に対しては、初期原稿で、「その年はお日さまが春から夏に白くぼんやりして・・・、5月になつてもたびたび霞がふり、北の海はまだ氷がいつもの5倍もあって、・・・それは夏になつても一向暑さがこないために去年播いた麦も粒の入らない白い穂しかできず、たいていの果実も花が咲いただけで小さな青い実が粒のまま。・・・秋になつても一番大切なオリザ(稲)の学名が一つぶもできませんでした。・・・注4)と東北の冷害がかかれています。

凶作とそれに続く飢饉で両親は死を秘めて森に消え、残された妹とも生き別れとなったブドリが流転のすえに火山局の助手として働きはじめ、再び襲ってきた冷害と飢饉を防ぐために、自らの若き命と引替えて闘う話です。

そして「アスコブドリ」の伝記」の終章は、ブドリ27才の春、再び厳しい夏の寒さがやってきた。ブドリは師、フウフィーボ博士に、「干魃ならなんでもないが寒さとなると仕方がない」宿命的な言葉を語らせます。5月がすぎ6月となつても寒さが残り焦燥がこうじて嘆願するブドリに対して、「きみがどうしても、夏の寒さから救うことをあきらめることができない

なら、たった一つの道がある」と大博士は語る。もし上層気流の強い日に火山を噴火させるなら、炭酸ガスはすぐ大循環の風に混じって地球全体をつむだろう。地球全体の温度が、計算によると温度を7度あげることができる」と注3)、温室効果、偏西風、大気大循環による拡散と深い知識を総動員した計画を語りました。しかし

あれが、火山)爆発する時はもう逃げるひまも何もないのだ」と死との引替えを暗示する。そして計画は実行され 数日のうちだんだん暖かくなつてとうとう普通の作柄)となつて冷害から救われた。みんなブドリのために喪章をつけた旗を軒ごと立てた、というところで終わります。

科学の世界と仏教の捨身の世界との接点をそこに見えています。私は命を大事にして理想郷、イーハトーヴのために働く」と学問と農業の実践的な働きで本質に迫るブドリのなかに、賢治自らを投影して描いていたのです。

+++++++++

注1) 宮澤賢治全集(ちくま文庫 第八巻

注2) イーハトーヴの世界・・・

宮沢賢治が描いた自然と農業が調和した理想郷

注3) 現在では火山爆発をさせると、火山灰が上空に上がって、日射を減らすので、むしろ冷害をもたらすとされています。炭酸ガス(CO2)を出すのは地球温暖化として妥当です。

注4) 「アスコブドリ」の伝記」